



『白浜町』をたずねて

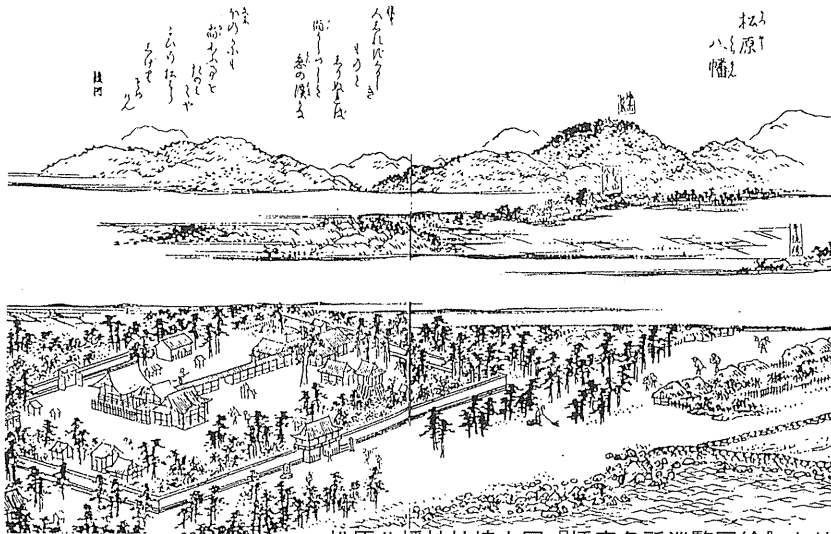
白浜町は、もとの石清水八幡宮領松原荘の中心部に位置し、明治10年(1877)に飾東郡の中村・宇佐崎・松原の3大字を合わせて白浜村が成立した。

村名の命名は、もと姫路藩校好古堂教授で時の松原八幡神社宮司亀山雲平が「蒼海変じて白浜となり松を生ずること粟の如し」という伝承にちなんで命名したものである。

明治22年(1889)に市制町村制施行により単独で自治体を形成した。明治29年(1896)の飾東郡と飾西郡の合併により飾磨郡に所属した。昭和21年(1946)に姫路市と合併し現在に至っている。

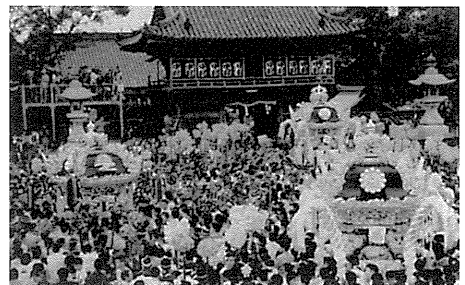
白浜町は早くより地場産業が発展した地域である。享保3年(1718)に炭本総右衛門が近郷の古鉄を買い集めて和釘の製造を始めたものが広がり「松原釘」として隆盛したが、その後洋釘の輸入によって衰退した。しかし、その伝統を生かしながらナット・鎖工業等諸工業への転換がはかられた。

明治30年(1897)には初めて燐寸工場が創設された。戦後急速に発展し関連工場も数多くでき、ナット・鎖工業と並ぶ主要な地場産業に発展した。また、かつては海岸部に整然とした塩田が開け、製塩業が盛んな地域であった。廃田後、昭和53年にはじまった土地区画整理事業で工業用地に生まれ変わった。



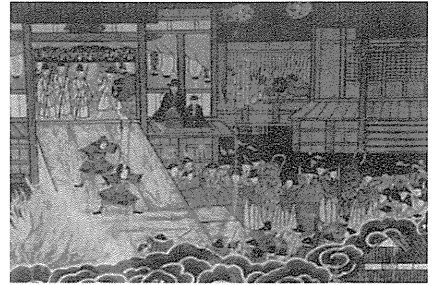
松原八幡神社境内図『播磨名所巡覧図絵』より

松原八幡神社 社記によれば天平宝字7年(763)に創建されたと伝える。妻鹿の漁民久津理が海中より八幡大菩薩と書かれた紫檀の朽木を拾い上げたことから、豊前の宇佐八幡宮の分霊を祀ったという。弘仁年間(810~823)には、嵯峨天皇が神田や神馬、宝剣を寄進する等社殿も荘厳さを誇っていた。その後、たび重なる兵火によって社殿は焼失し、現在の社殿は享保3年(1718)氏子たちによって造営されたという。三間一戸の楼門は市指定文化財。打刀拵は県の文化財に指定されている。毎年10月14日・15日に行われる秋季例祭は「灘のケンカまつり」とも呼ばれ、旧灘7カ村の氏子たちがそれぞれの村の豪華な屋台を華々しく練り競い、三基の神輿を激しくぶつけ合う日本を代表する力強い祭である。平成18年3月17日に「松原八幡神社秋季例祭風流」として県無形民俗文化財に指定された。



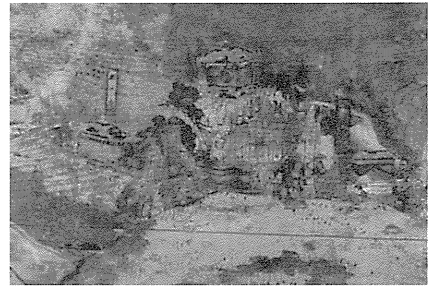
松原八幡神社秋季例祭

八正寺夜鬼会大祭典絵馬 八正寺薬師堂内に明治40年(1907)に奉納された横370cm、縦164.5cmの夜鬼会を写実的に描いた絵馬が掛かっている。色彩鮮やかに赤鬼、青鬼や幟、提灯、鐘、太鼓等を持ち町中を行列する中村の人々の姿が生き生きと描かれ、明治の夜鬼会を知る貴重な資料である。夜鬼会の始まりは、万寿2年(1025)ごろに、播磨に疫病が流行したため後一条天皇の皇太后清浄覚尼公が、念持仏の薬師如来を八正寺に奉安し、祈禱会を行ったところ疫病がおさまり、人々は大いに喜び修正会を盛大にしたと伝えられている。



八正寺夜鬼会大祭典絵馬(部分)

松原八幡宮祭礼絵馬 神社境内舞殿に、二つに折れているが横612cm、縦145cmの大作で流鏝馬・神輿・天童(一つ物)・露払い獅子・傘鉾や氏子7カ村の状態など秋季例祭の様子を克明に描いた貴重な絵馬が保存されている。絵馬の裏の棧に「嘉永四歳亥六月中旬 御宮大工棟梁 松原村住岡本勘左衛門重近 俣勘治良」の墨書銘があり、嘉永4年(1851)に奉納されたことがわかる。



松原八幡宮祭礼絵馬(部分)

下乗石 松原八幡神社楼門前に中央部を舟形に彫りくぼめ、その中に大きく「下乗」と書かれた板石が建っている。宝暦10年(1760)の「寺社明細帳宇佐崎組」に「下乗石往古ハ社地之境東西ニ御座候処何頃よりカ楼門之前へ引申候」とある。応永15年(1408)の古文書によると松原八幡神社の敷地は東西6町、南北2町とあり、下乗石は東の境と西の境に建てられていたものが楼門前に移されたものである。他の下乗石の残欠が神社の敷地の南東隅に残っている。

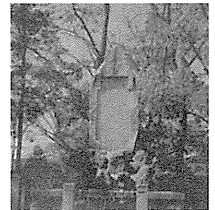


下 乗 石

亀山雲平と観海講堂跡 亀山雲平は節宇と号し、姫路藩士時代は大目付、好古堂教授、藩主に学問を教える侍読等の要職を務めた。春山弟彦、庭山武正とともに姫路三山と称され、姫路を代表する碩学であった。明治6年(1873)に松原八幡神社宮司に奉祠し、私塾久敬舎を開き子弟の教育にあたった。その後明治17年(1884)には、現在の白浜小学校の地に講堂と塾舎を建て観海講堂と称し、播磨一円の子弟の教育にあたり「播磨聖人」と呼ばれた。白浜小学校内に観海講堂跡石碑と小学校の南に大正3年(1914)に「節宇亀山先生顕彰碑」が建てられたが、現在は松原八幡神社境内に移設されている。



観海講堂跡石碑



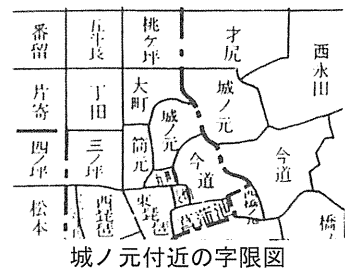
節宇亀山先生顕彰碑

桜大刀自神社 もとは灘中学校の西の方蓮山の山腹にあったものを現在地に移したものである。祭神は木花開耶媛命で、古くより安産の神様として地元民の信仰を集めていた。『播磨鑑』によれば、社名は桜大歳神社と呼ばれ、天平のころは松原八幡神社の「社務の旧地」であったという。



桜大刀自神社

恋の浜構居跡 松原八幡神社の東北約500mに「城ノ元」という字があり、恋の浜構居があった跡であるといわれている。その周辺には大町、筒元、丸町、今道等の字がある。構居に係るものだといわれ、筒元は武具を蔵した所であるという伝承が残っている。城主は、妻鹿孫三郎の幕下松原掃部介という説等もあるが、詳しくは不明である。



城ノ元付近の字限図

松原の廻国塔 御旅山と海山^{うみやま}の間の国道250号と旧道の交差点にある。天保15年(1844)の建立で、中央に大きく「南無阿弥陀仏」左右に「国土安全」「天下和順」と刻まれている。廻国塔は、納経塔の一種で大乗妙典と呼ばれる法華経を霊場に納めるために諸国を行脚することを銘文にした塔である。市内には飾東町八重畑・四郷町山脇等にも残っている。

松原墓地の石棺仏 松原墓地の一角に南面して立っている。高さ109cm、幅68.5cmの家形石棺蓋石の内面の中央上部を舟形輪郭に彫りくぼめ、その中に像高32cmの地藏菩薩立像を半肉彫りしている。その下方に像高16.5cmの合掌する座像が2体彫られている。銘文はないが造りから室町時代の作と推定されている。この石棺仏は昭和初期に矢倉島の東、通称石棺島から出土したものを現在地に移したものである。

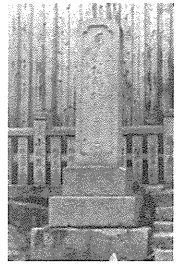
美土呂公園の道標と石棺 右は八家地藏、曾根、高砂、左は飾磨、室津への道を示す道標がある。松原八幡神社の南東、旧中村の甲378番地にあったものを移したものである。その左に横150cm、縦78cmの縄掛突起を持つ家形石棺の蓋石(出土地は不明。釈迦堂の境内にあったものを移した。松原の荒神社の境内にも縦85cm、横140cmの石棺の蓋がある)と姫路に通じる道にかかっていた美土呂橋の由来碑、大正7年(1918)の中の道竣工記念碑がある。

蛭子神社 八木港の西岸にある蓬萊山(通称棲神の小島)に鎮座する神社で、古くより地元民や船乗りたちの信仰を集めていた。創始は、古く天平宝字7年(763)といわれている。宝暦10年(1760)の『寺社明細帳宇佐崎組』に「小嶋之磯辺へ海中より神童駿馬二乗り上り給候、神形ヲ羨ひすと崇祭り申す候」とある。山頂から弥生式土器片や土師器が採集されている。参道の入口の脇に寛保3年(1743)に置塩茂七郎道兼、河野弥右衛門通生らによって蛭子神社の山上奉遷を記念して建立された石碑がある。この石碑は、かつて神社の北西に広がっていた沖浜塩田が、寛文8年(1668)に開発に成功するまでの経過を詳しく説明した塩田開発史の貴重な史料になっている。

宇佐崎の道標 旧道と国道250号と交差する丙288の11番地に白浜青年団第八支部が建てたものである。右は八木、大塩、左は糸引、御着等を示している。折損しているが、現在、宇佐崎の妙覚寺境内に移設されている。もう一基は宇佐崎公民館前に建てられていたが、所在がわからなくなっている。

石手神社 石手という名前は、愛媛県の石手寺にちなんで名付けたもので、建武年間に河野通元によって創祀されたものであるといわれている。祭神は、伊予の豪族河野氏の始祖にあたる孝霊天皇第三皇子。河野水軍と宇佐崎の地が関係深いことがわかる。

白浜の石造遺品 宇佐崎の常住寺には、延宝9年(1681)の題目塔。中村に安政4年(1857)の異向地藏尊等がある。



松原の廻国塔



松原墓地の石棺仏



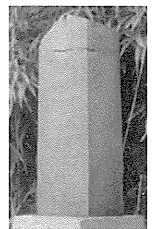
家形石棺蓋石と道標



蛭子神社



宇佐崎の道標
(妙覚寺境内)



蛭子神社山上
奉遷記念石碑



石手神社

■編集 石塚太喜三 (市教委文化課指導主事)